

硯瓶の水

田村, 隆
九州産業大学講師

<https://doi.org/10.15017/19770>

出版情報 : 語文研究. 107, pp.23-35, 2009-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

硯瓶の水

田 村 隆

一

昭和二十四年の十二月から『毎日新聞』に連載された谷崎潤一郎の『少将滋幹の母』は、

此の物語はあの名高い色好みの平中のことから始まる。源氏物語未摘花の巻の終りの方に、「いといとほしと思して、寄りて御硯の瓶の水に陸奥紙みちのくかみをぬらしてのごひ給へば、平中がやうに色どり添へ給ふな、赤からはあへなんと戯れ給ふ云々」とある。

という説明で始まる。(注)源氏が戯れに自らの鼻に塗った紅色を、

紫上が必死に拭い取ろうとする場面である。「平中がやうに」とは、いわゆる「平中墨塗譚」と呼ばれるもので、女の前で泣く平中の涙について妻は、それが硯瓶に入れた水を眼にこっそり差した偽りの涙だと見破った。

この平中、さしも心に入らぬ女の許にても、泣かれぬ音を、空泣きをし、涙に濡らさむ料に、硯瓶に水を入れて、緒をつけて、肘に懸けてし歩きつ、顔袖を濡らしけり。出居の方を妻、のぞきて見れば、間木に物をさし置きけるを、出でてのち、取り下して見れば硯瓶也。また、畳紙に丁子入りたり。瓶の水を(沃)うてて、墨を濃くすりて入れつ。
〔『古本説話集』上十九「平中事」〕

そうとは知らぬ平中は、「鏡を見れば、顔も真黒に、目のみきらめきて、我ながらいと恐ろしげなり」という有様となった。このエピソードを踏まえ、紅色だけでなく平中のような墨の黒色まで「添へたまふな」と源氏が懇願する場面である。平中はこの後若菜上巻でもう一度、「平中がまねならねど、まことに涙もろになん」として引き合ひに出されている。

しかし、現在読まれている『源氏物語』の末摘花巻は、谷崎が紹介したそれとはいささか異なる。たとえば、「新編日本古典文学全集」には、

そら拭ひをして、「さらにこそ白まね。用なきすさびわざなりや。内裏にいかのたまはむとすらむ」と、いとまめやかにのたまふを、いといとほしと思して、寄りて拭ひたまへば、「平中がやうに色どり添へたまふな。赤からむはあへなむ」と戯れたまふさま、いとをかしき妹背と見えたまへり。

とあるのみで、硯瓶も水も陸奥紙も出てはこない。

谷崎は『源氏物語』の現代語訳に三度挑んだことでも知られるが、昭和十四年の「旧訳」では、

お側へお寄りになりながら、おん硯の水みづせしの水に、陸奥紙をお濡らしになつて拭ふいてお上げになるのであつたが、と訳され、小説に引用された内容とほぼ対応するものの、昭和二十六年九月刊行の「新訳」の段階では、

側へ寄つてお拭きになりますと、

と短くなっている。「おん硯の水みづせしの水に、陸奥紙をお濡らしになつて」という紫上の所作が消えているのである。昭和二十六年九月といえば、『少将滋幹の母』の連載開始から二年足らずであるが、これは一体どのような事情によるものかであろうか。

この場面を扱った作品は他にもある。少し遡るが、堀辰雄が昭和五年に「末摘花」という小品を発表している。末摘花巻を題材に舞台を現代に設定した小説である。今取り上げている箇所を引用しよう。(注之)

私はわざと紙でもつて、それを空からめく拭ひした。

「どうしても落ちないよ。困つたな。」

「おばかさんね。」

さう言ひながら、女は自分のハンカチを盃洗の水に濡らして、それで彼の鼻のさきを綺麗に拭いてくれた。彼はまだ田舎の女への贈物のことを考へながら、こんないい女友達が自分のすぐそばにあるのに、どうしてあんな女になぞラヴ・レターを書いたのかしらと、いまはむしろそれを不思議さうに彼は思ふのだつた。

「陸奥紙」の役割を果たす「ハンカチ」を「盃洗の水に濡ら」す仕草が描かれている。また、新劇場上演「源氏物語」第三幕の台本（番匠谷英一、昭和八年）にも、

源氏（頷いて拭く真似をする）これはいけない。どうしても消えなくなつてしまつた。人が見たら何と云つて笑ふだらう。（と真顔にたはむれる）

紫上（心配さうに硯の水注の水を陸奥紙にしめして）じつとして。……私がとつて上げますから。……（と源氏の鼻を拭く）

源氏（微笑して紫上のするがまゝにまかせてゐる）

という場面がある。^{注3}ここでも、「硯の水注の水を陸奥紙にしめ」す所作が織り込まれている。

二

もう一つの事例を紹介したい。「サクラ読本」の愛称で知られる第四期国定国語読本『小学国語読本 尋常科用』は昭和十三年に刊行された。「サクラ読本」の名は、巻頭の教材が「サイタ サイタ サクラ ガ サイタ」という文章であることに由来し、巻十一の「第四 源氏物語」は小学生向けの『源氏物語』教材としてもしばしば言及される。教材化にあつては時局を鑑みてさまざま「教育的配慮」がなされたこと、それでもなお一部から痛烈な批判を浴びたことなど、有働裕『源氏物語』と戦争―戦時下の教育と古典文学―^{注4}に詳しい。たとえば現行の教科書には「小柴垣の垣間見」といった見出して掲載されることの多い若紫巻においても、サクラ読本には小柴垣も垣間見も登場しない。ただ、雀の子をめぐる紫上達の様子が描かれるだけである。

末摘花巻のエピソードについても、同様の姿勢で編纂されたとと思われるが、以下に本文の一部を掲げよう。

今日も源氏は紫の君に画を書いて見せた。いろ／＼の画を書いてやつた。最後に女の画を書いて、其の鼻を赤く

ぬつて見せた。紫の君は思はず笑ひ出した。源氏は筆の先に赤い絵の具をつけて、鏡を見ながら、自分の鼻をいたづらに赤くぬつて見せた。紫の君は、とう／＼笑ひこけてしまつた。「わたしの鼻が、ほんたうにかう赤かつたら、どうだらうね。」

「まあ、いやなことをおつしやる。」

紫の君は、絵の具がほんたうにしみ込んだら、にいさんがお気の毒だと思つた。源氏はわざと拭いたまねをして、「ほら、すつかりしみ込んでしまつた。落ちないよ。」

と言つて、まじめな顔をしてゐる。紫の君はさも心配さうに、水入の水を紙にひたして、源氏の鼻を拭きにかつた。

「いや／＼、赤い方がまだ増しだ。此の上、墨でも附いて黒くなつたら大変ぢやないか。」

「すつかり落ちましたよ。」

「落ちた。それは有難い。」
さつきまで泣いてゐた紫の君は、すつかり晴れやかになつてゐた。外はうら／＼かな春の日である。木々の梢がぼうつとかすんでゐる中に、とりわけ紅梅が美しくほ／＼ゑんでゐる。

紫の君はさも心配さうに水入の水を紙にひたして源氏の鼻を拭きにかつた。
「いや／＼、赤い方がまだ増しだ。此の上墨でも附いて黒くなつたら大変ぢやないか。」
「すつかり落ちましたよ。」
「落ちた。それは有難い。」
さつきまで泣いてゐた紫の君はすつかり晴れやかになつてゐた。
外はうら／＼かな春の日である。木々の梢がぼうつとかすんでゐる中にとりわけ紅梅が美しくほ／＼ゑんでゐる。

サクラ読本

この文章では末摘花の滑稽という側面を全く扱っていない。^(注3) 平中の失敗についても言及がない。若紫巻で源氏や惟光や小柴垣を描かなかつたのと同じ手法と言えるが、傍点を付した箇所「水入の水を紙にひたして」とあるように、サクラ読本においてもこのくだけは存在することに今は注目しておきたい。^(注4)

では、読本の執筆に用いられた『源氏物語』のテキストはどのようなものだったのか。私見によれば、最も可能性が高いのは、島津久基校注の旧版岩波文庫（昭和三年。四六判の

教科書版は昭和七年^(注7)であると思われる。本書の本文は、サクラ読本の指導書といえる国語教育学会編『小学国語読本総合研究 巻十一』（岩波書店、昭和十三年）にも教材の「原拠」として紹介されている。

源「更にこそ白まね。用無きすさび業なりや、内裏にいかん宣はむとすらむ」と、いと真実に宣ふを、いといとほしと思して、寄りて御硯の瓶の水に、陸奥紙を濡らし、て拭ひ給へば、源「平仲がやうに色どり添へ給ふな。赤からむはあへなむ」と戯れ給ふ様、いとをかしき妹背と見え給へり。

島津は、読本の執筆者井上越にとつて東京大学の一つ違いの後輩であり、学生時代から親交があつたことが指摘されている^(注8)。島津の『対訳源氏物語講話』は若紫巻が昭和十五年、末摘花巻は昭和十七年の刊行であるからサクラ読本の編纂に参照することはできなかつたが、同じく島津が抄訳を試みた『物語日本文学』（至文堂、昭和十年）はあるいは参考にしたかもしれない。旧版岩波文庫の凡例には、

本書も、此の系統で湖月抄本よりは善いとせられてゐる

首書源氏物語を底本とした。……校訂の方針としては、明らかに誤脱と目せられ、若しくは改めるを至当と信じた部分のみを、玉の小櫛、評釈、湖月抄を初め新旧諸註諸本に照らして補正した他、成るべく忠実に底本に依拠して濫に改めぬこととし、……

とあり、『首書源氏物語』（寛文十三年刊）を底本に用いたことが述べられている。この時期、『首書源氏物語』を利用したテキストは有朋堂文庫や日本古典全集など他にも多く見られ、この箇所については旧版岩波文庫と同様の本文を有する。

ところが、『首書源氏物語』の本文は、

いといとおしとおぼして、よりてのごひ給へば、へいちうかやうに色どりそへ給ふな、あかゝらんはあへなん

である。旧版岩波文庫の云う「校訂の方針」によつて、本文が改められていることになる。

三

現行の『源氏物語』テキストにこの箇所がないことは先に

述べた。『源氏物語大成』校異篇によれば、青表紙本系の本文には一切ないのに対し、河内本には、

御硯のかめの水にみちのくにかみをぬらしてのこひ給

とあり、また別本のたとえば陽明文庫本には、

すゝりかめの水にかみをぬらしてのこひたまふ

とあって、これらは旧版岩波文庫の本文に近い。その他、『源氏物語』の板本は、古活字版・無跋無刊記整版本・『絵入源氏物語』・『首書源氏物語』・『湖月抄』が代表的なものであるが、そのいずれを見ても硯瓶のくだりは出て来ない。

堀辰雄は昭和十五年に発表された随筆「若菜の巻(注9)」において、『源氏物語』について次のように述べている。

それは一昨年の夏でしたか、これから「ほととぎす」を書かうとしてみたところでしたので、丁度手許にあつた湖月抄本とウエイレイの英訳とをちやんぼんに見ながら忽いで走り読みをしました(注10)が、そんな怪しげな読み方も随分面白かつた。

とある。『湖月抄』にこの場面がない一方で、ウエイリーの訳を佐復秀樹氏の日本語訳で示すと、

とても真面目にこう言ったものだから、紫はひどく悲しくなり、これを治したいと願って、厚く柔らかい紙を源氏の筆記用具のそばに置いてあつた水差しに浸すと、鼻をこすりはじめた。

のごとく、対応する記述を備えている。小説「未摘花」に見られるハンカチの描写はウエイリー訳の影響もあつたかもしれない。

ここで、旧版岩波文庫と同じ本文を持つている代表的なテキストを文庫刊行年の昭和三年から遡ってみよう。

日本古典全集（日本古典全集刊行会、大正十五年）

校註日本文学大系（国民図書、大正十五年）

定本源氏物語新解（明治書院、大正十四年）

有朋堂文庫（有朋堂書店、大正六年）

校註国文叢書（博文館、大正元年）

国民文庫（国民文庫刊行会、明治四十二年）

日本文学全書（博文館、明治二十三年）

このように、明治から大正にかけて刊行されたテキストの多くが、硯瓶のくだりを有している。^(注1)その影響は当然各種の現代語訳にも及んだ。冒頭に谷崎訳を紹介したが、二度目以降の訳で硯瓶のくだりが削除されたのも、戦後の新しいテキストを参照されたためと想像される。与謝野晶子訳も明治四十五年の『新訳源氏物語』において、

そのまま捨てておくと中までしまないかと心配して紙に水を含ませて拭き^ふに來た。

と訳し、昭和十三・十四年の『新々訳源氏物語』でも、

そばへ寄つて硯の水入れの水を檀紙にしませて、若紫が鼻の紅を^ふく。

となつている。湯浅光雄氏が日本古典全集の『源氏物語』を手に訳業をすすめる晶子の姿を目撃したというエピソードは、このテキストが硯瓶のくだりを備えている点からも首肯できるものである。^(注2)一方で、鞍馬寺に晶子所持本が残る小本『絵入源氏物語』には先述したようにこの部分がない。

しかし、この時期に刊行されたテキストが揃つて河内本や

別本の本文を直接参照したとは考えにくい。それに、若干ではあるが本文も異なる。国民文庫の凡例にも、「本書は、板本中の善本たる首書本を底本として、万水一露湖月抄等の諸本をもて校訂し、本居宣長の玉の小櫛、鈴木胤の玉の小櫛補遺、萩原広道の評釈等も亦参照せり」とあるように、稀覯の写本を校訂に用いた形跡はない。

ここに挙がつている諸書のうち、日本文学全書や有朋堂文庫などの本文校訂に直接影響を与えたと思われるのは、萩原広道の『源氏物語評釈』（嘉永七年刊）である。花宴巻までの注釈書ではあるが、この箇所『評釈』本文には、

よりて。御硯のかめの水に。みちの国が^瓶みをぬらして。
^{タテヨリテ}のこひ給へば。^(注3)
^試

とあり、冒頭から見てきた本文に完全に一致する。さらに「釈」として、

此句落たる本あり今河海に引れたる本又一本によりて補ひつ硯の瓶は^瓶今水いれといふもの、事也此句より平仲を出し來れり味はふべし

とある。「硯瓶」に入っていた墨が平中に悲劇をもたらしたことを踏まえれば、ここに説かれるように末摘花巻にも「硯瓶」という共通項が存在した方が二つのエピソードが響き合うのは疑いない。ただし、それは逆に言えば、同様に考えて後人が書き加えた可能性も考えられることを意味する。

この本文は広く知られていたようで、神宮文庫所蔵の宝永三年版『首書源氏物語』にも、「いとおしとおぼして、よりて」と「のごひ給へば」との間に補入記号があり、

御硯のかめの水にみちの国紙をぬらして、^イ

と補われている。表記に至るまで『評釈』と一致している。そして明治以来の活字本もまた、『評釈』を大いに利用していると考えてよさそうである。この時期のテキストが必ずしも『首書源氏物語』に忠実でないことは注意すべきであろう。

四

明治・大正期に流布したテキストと『評釈』の関連性は、同じ末摘花巻をいくつかのテキストを並べて通覧してみても、

有朋堂文庫	旧版岩波文庫	首書源氏物語	源氏物語評釈
忍びて入りて 御直衣ども 左大臣 おと、 高麗笛 こまぶえ 心にて 生女房 たたらめの	忍びて入りて 御直衣 左大臣 おと、 高麗笛 こまぶえ 心にて 生女房 たたらめの	忍び入りて 御直衣 左大臣 おと、 高麗笛 こまぶえ ところにて 生女ばら た、梅の	しのびて入りて 御なほしども おと、 左大臣 こまぶえ こころにて おと、 高麗笛 こころにて なま女ばら たたらめの

といった例が拾え、表記を含め、『首書』と異なり『評釈』と一致する事例が散見される。この傾向は右の二書に先立つテキストにも窺え、先行のテキストをそのまま踏襲したと思われる箇所もかなり多い。

では、『評釈』に見られる硯瓶のくだりをさらに遡ることのできるのか。『評釈』の「本文訳注凡例」には、

今ノ此本文は。互に校へ合せて。そのよろしき方にしたがひて定めつ。其本どもは万水一露。湖月抄の本をはじめ。別におこなはるゝ板本五部ばかりに。古き写本三部を校へ合せたるに。玉ノ小櫛に校正せられたると。余滴にをりく引出たるとを。あひまじへて用ゐつ。

と説明されている。第一に拳がつている、『万水一露』(寛文三年刊)を確認すると、

よりてのごひ給へは 紫君ののごひ給也

御すゝりのかめの水にみちのくにかみをぬらしてのごひ給へはへいちうかやうに色とりそへ給な 河宇治大納言
物語云平仲文は女のもとに行てなくまねをして硯の水入をふところにもちてめをなんぬらしけるを女心えて墨をすり入たりけるをしらて又ぬらしければ女鏡を見せてよめる

とあり、「御すゝりのかめの水にみちのくにかみをぬらしてのごひ給へはへいちうかやうに色とりそへ給な」という本文が挙げられている。これは、『河海抄』とほぼ同文であり、その影響を受けたものと思われるが、『河海抄』の項目を抜き出すと、

むもんのさくらのほそなか

御すゝりのかめの水にみちのくにかみをぬらしてのごひ給へはへいちうかやうに色とりそへ給な
あかゝらんはあへなん

の順であり、その配列が注目される。すなわち、『河海抄』では該当の項目は「御すゝりのかめ」云々の一項であるのに対し、『万水一露』においては、「よりてのごひ給へは」の本文と「御すゝりのかめの」の本文を並記している。そして、この体裁は後に、本居宣長の小さな勘違いを引き起こした。『評釈』の凡例に同じく名の拳がつている『源氏物語玉の小櫛』(寛政十一年刊)の「四の巻」には宣長の本文校訂が示されているが、そこには、

よりて御硯の。か。め。の。水。に。み。ち。の。国。紙。を。ぬ。ら。し。て。の。ご。ひ。給。へ。ば。同

とある。「古^コといふは、湖ノ字をはぶけるなり」と説明がある。すなわち、○印を付した部分が『湖月抄』にないという意味である。『万水一露』と同じ本文が拳がついて注目される。そして、杉田昌彦「本居宣長の『源氏物語』本文研究^{注15}」は、この箇所について宣長手沢本の『湖月抄』に書人があることを指摘し、

宣長は、「よりてのごひ給へば」という『湖月抄』の本文の「よりて」と「のごひ」の間に補入記号「○」を付

し、その本文の真上付近の匡郭外に墨筆で次のように記している。

○御すゝりのかめの水にみちの国かみをぬらして

万水本ニアリ

と述べている。宣長は『万水一露』を参照して書入をなしたと考えてよいであろうが、その際、『湖月抄』の「よりて」を残したまま「御すゝりのかめの水にみちの国かみをぬらして」を補入したのは厳密に言えば正確な処理ではなかった。細部にわたることではあるが、「源氏の近くに寄る」↓「硯瓶の水に陸奥紙をぬらす」↓「源氏の鼻を拭う」という三つの動作の流れはいささか不自然であり、それは「よりて」が偶然的に混入したとことと関係があるように思われる。その一因となったのが、『万水一露』の画説並記ではなかったか。以上の考察を踏まえれば、

河海抄 ↓ 万水一露 ↓ 玉の小櫛 ↓ 評釈 ↓ 明治・大正期のテキスト

という道筋が推測される。板本の代表格である『絵入源氏物語』や『首書源氏物語』、『湖月抄』などには全く見られない小さな仕草が近代のテキストに流れ込んでいる現象は、一つ

には硯瓶のくだりが享受の中で一定の評価を得てきたためでもあるが、近代の『源氏物語』本文が誕生した明治二十年代のテキストに取り入れられたことも、後続の本文校訂に対して実に大きな影響があったと思われる。

五

源氏と紫上が鼻の紅色をめぐって遊ぶ光景は、宣長の時点で河内本・別本とも少し異なる独自の加工本文が生まれたが、その影響力は大きく、近代に入っても冒頭に見たようなさまざまな形をとって流布した。

硯瓶や陸奥紙については、すでに言及した近世期の板本のほか、石山寺所蔵『源氏物語画帖』など絵画資料の該当場面にも見受けられないが、最後に興味深い資料を二つ紹介したい。

一つは、文政十二年から刊行された柳亭種彦の『修紫田舎源氏』である。その十編には末摘花巻のパロディーが描かれる。

光氏わざと紙をもて、落ちぬほどに押し拭ひ、「いかにもそなたの言ふ通り、元のやうには白くならぬ、益なき

ことをなしてげり。室町の父君に、何と言ひ訳なすべき」と、実しやかに言ひければ、紫はいとほしき、ことゝ思ひて振袖へ、鬢水入の水をつけ、立ち寄りて押し拭へば、光氏はにつこと笑み、……

元の物語にかなり忠実な構成であり、「陸奥紙」は「振袖」に、「硯瓶の水」は「鬢水入の水」に置き換わっていると考えるのが自然であろう。だとすれば、書人本などを含め、硯瓶のくだりを持つテキストを使用したと思われる。「鬢水入の水をつけ」る動作がさりげなく「立ち寄りて」の前に置かれていることにも注意したい。

もう一つは、『守武千句』（天文九年成立）である。その巻七には、

うちぐもりにて春のを山

硯までわかむらさきの窓の前

くろかるいろはありやしやと

という連句がある。沢井耐三『守武千句考証』（汲古書院、平成十年）によれば、

硯までもが紫色である。黒い色であるはずの硯さえ紫と
いうのでは、世間に黒色というものがあるのかどうか、
おぼつかない、の意。（雑）「若紫」に「黒かる色」と対
比した。「ありやしや」は歌語。

と説明されるが、^(雑)「硯」と「わかむらさき」の前句を受けた「くろかるいろはありやしやと」の一句は、墨の「くろかるいろ」が混じっているのではないか、という源氏の懸念を念頭に置いたものと見るべきではあるまいか。この私案が認められるならば、守武が「硯の瓶」の登場する本文を読んでいたことを想定したと思われるが、このとき刊本はまだ世に出ず写本で流布していた『万水一露』をその候補として考えてよいだろうか。後考に俟ちたい。

注

注1 『谷崎潤一郎全集 第十六巻』中央公論社、昭和四十三年。

注2 引用は『批評集成源氏物語』による。

注3 注2に同じ。

注4 インパクト出版会、平成十四年。

注5 明治四十五年五月四日の長崎新聞には、未摘花を題材にした「クラブ洗粉」、「クラブ白粉」の興味深い広告記事が見える。次頁の図版は長崎県立長崎図書館所蔵資料による。

ただし、この末摘花巻のエピソードは結局わずか一年間しか用いられなかった。サクラ読本が発行されたのは昭和十三年であったが、

「いとをかしき妹背と見えたまへり」といった雰囲気が認められることが嫌われ、翌十四年の修正版では紅葉賀巻の一節に差し替えられてしまっている(図版)。

修正版は教科書自体も写真は鮮明さを欠き、紙質も落ちていたためサクラ読本のような手にとった時の重量感がない。尚、教科書の図版引用は架蔵本による。教科書版には「附記」として、「本叢書は、高等諸学校教科用に供するを目標として編輯したものであるが、一般国文学研究者に取つて非常に便利な書入本とな

末摘花

光風生

すみ子さんは姉さまのたみ子さんが讀んで入らつしやる源氏物語を分るやうに話してくれとせがんで仕方がございますんでした。

そこへたみ子さんは、丁度よみました末摘花の御様子をやさしく話してきかしました。

夫は、源氏の君が幾度も幾度も入らしても其は態様はなかく顔をお見せなさなかつた、處がある雪の降つた翌日の事、君が手つから戸をお開けになつてまアこの光色でも御覽になりませんか、そんなにお隣でなさなくても好いではありませんか。お恨みになるも、老女な

事でもござります、お心さへ美しければ好いではございせんかと云つたので、元から願なしい人ゆゑ、一寸襟元を直してお出になつたのを御覽になる。夫は夫は丈夫が高くて、其上その腹せると言つたら、袴物の上からでも痛い位に見えそ

れにまだくふしきなどは、お鼻が全で象のやうで、しかも先の方の垂れた處が赤くならで居るのです。

それからいふのでした、するすすみ子さんはいふ様子を打つて、あゝとそれではその御姫様はツツン洗粉もツツン白粉も使はなかつたのでせうと誹刺に言ひました。

長崎新聞 (明治45年5月4日)

と言つた。

三尺の書棚にたくさんの人形や、家や車が並べてある。紫の君はそれを部屋中にひろげて人形遊びにいそがしい。

「豆まきをするつて此のお人形さんを犬君がこはしました。私がつくろつたのよおにいさん。」
どさも大變な事でもあるやうに紫の君は源氏に言つた。

「よし／＼。私が後でりつばになほして上げよう。今日はお正月だから、泣いてはいけませんよ。」
と言つて源氏は出て行つた。

第四 源氏物語

修正版

注 8
り得ると信じます」と記されている。
有働氏の前掲書。

注 9
平凡社ライブラリー版(平成二十年)による。原文は、He

said it so seriously that she became very unhappy, and longing to cure him dipped a piece of thick soft paper in the water-jug which stood by his writing-things, and began scrubbing at his nose. 〆あ。ウエリーは末摘花巻を気に入つていたと見え、一九二二(大正十一年) The New Statesman 誌に An Introspective Romance と題するエッセイを寄せていることが平川祐弘『アーサー・ウエリー』源氏

物語』の翻訳者』（白水社、平成二十年）に紹介されている。ウエリーは未摘花巻について、「これが『源氏物語』を代表する典型的な挿話だというのではない。だが、このようなエピソードは作品のソフィステイクーションのほどを示している。こんな情景はブルーストの作中に挿入されてもそのまま通用する知的熟成であろう」と評したという。『源氏物語』が世界的な文学であることを教材の解説で強調したサクラ読本によって、場面選択にこのウエリーの評が影響したということとはなかったか。

注11 「日本古典全集」は「元和本活字本」の「誤写と脱落」として『首書』の本文を補入している。「国文大観」（板倉屋書房、明治三十六年）にはこのくぐりがない。

注12 神野藤昭夫「与謝野晶子の読んだ『源氏物語』」（『源氏物語へ源氏物語から——中古文学研究24の証言——』笠間書院、平成十九年）により、湯浅光雄「春宵閑話（二）晶子源氏と金尾文淵堂」（『日本古書通信』三十九・一、昭和四十九年一月）の存在を知った。

注13 「国文註釈全書」による。

注14 「源氏物語古注集成」により、『静嘉堂文庫所蔵 物語文学書集成』所収のマイクロフィルムを適宜参照した。尚、写本には「ぬらしてのごひ給へは」の如く傍記がある。

注15 『論叢源氏物語Ⅰ 本文の様相』新典社、平成十一年。

注16 飯田正一編『守武千句注』（古川書房、昭和五十二年）は同様の解釈を示しつつ、「わかむらさき↓ありやなしや」の連想も、あるいはあろうか」と述べて、『伊勢物語』初段の「春日野の」歌と同九段の「名にし負はば」歌を挙げる。

（付記）本稿は、平成二十一年度文部科学省科学研究費補助金若手研究B（研究課題番号20720056）による研究成果の一部である。

（たむら たかし・九州産業大学講師）